

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 ほん きよんじや 韓 京子

本論文は、近松門左衛門（1653～1724）のいわゆる時代浄瑠璃の方法的特色を、主としてその作品に用いられる「趣向」に焦点を合わせながら解明したものである。構成は、第一部「近松の時代浄瑠璃における趣向」に「近松浄瑠璃における趣向としての歌謡・芸能」以下4章を配し、また第二部「近松の時代浄瑠璃における先行作品の摂取・展開」に「近松浄瑠璃の「十二段物」考察」以下3章を配する。

第一部では、近松の時代浄瑠璃で用いられている、種々の位相にある趣向—具体的には、作中で歌われ演じられる「歌謡・芸能」や、意図的な場面として挿入される「滑稽」、あるいは登場人物の心情や心理に関わる「心底」や「執着」等の諸趣向を明らかにし、それが劇の展開にどのように関わっているかを検証する。作中に取り入れられた歌謡（音曲）や、能（謡曲）などの芸能が、背景音楽としての役割を果たすのみならず、その詞章や曲調により、登場人物の心情表現ともなっていることを指摘し、あるいは愁嘆場の前に配された滑稽な場面が、後の劇展開の伏線となっていることを明らかにする。また、本心を押し隠す「心底」が、推理小説的な興味をかき立てつつ劇的緊張感を高めていることを、豊富な挙例によって論証し、さらに愛欲・忠義・復讐への執着・執念が単に登場人物の性格を表すだけでなく、「やつし」の構想や謀反劇における転生の構想と結びつき、従来の単純な善悪の対立という劇構造を突き崩すに至ったことを明らかにする。

第二部では、第一部で明らかにされた近松の特色を、先行作品から何を摂取し、どのように展開させていったのかという、通時的あるいは比較作品論的な観点から考察する。牛若と浄瑠璃姫の恋愛譚を素材にした「十二段物」の作品群の中で、近松の諸作は、牛若の貴種流離譚の要素を弱めつつ、平家討伐の成就に対する祝言を中心にすえたものであるという新見を提示する。また、義経物の一つ『源義経将棊経』を詳細に分析し、先行作品に登場する人物を、近松が、浄瑠璃の5段組織が定着しつつあるこの時期に、各段の性格と対応させながら造形し直していることを明らかにする。

従来の近松浄瑠璃の作品研究は、「曾根崎心中」以下の、同時代風俗を背景としたいわゆる世話物にかたより、浄瑠璃作品のほぼ4分の3を占める、作品世界の枠組みを過去の時代にとったいわゆる時代物は、「国性爺合戦」等のわずかな例外を除き、ほとんど手つかずのままであった。本論文は、膨大な近松の時代浄瑠璃と先行作品を丁寧に読み込み、浄瑠璃作者にとって作劇上の基本とされる「趣向」と「文句」のうち、劇構成に深く関わる「趣向」に注目することにより、近松時代浄瑠璃の劇構造を解明したところに、きわめて大きな意味がある。また、本論文は、世話物に比べて相対的に評価の低かった時代物の意義を、改めて見直す契機となるであろう。部分的に論述がやや錯雑としている箇所もあるが、未検討であった近松の時代浄瑠璃の作劇法を初めて明らかにしたところは、高く評価できる。よって、本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に相当するものと判断する。